

ホイットマン的伝統とエリオットの伝統

増谷 外世嗣

ホイットマン的伝統という言葉はエリオットの伝統という言葉と対比して並列すること自体に対して、或る種の抵抗が感じられる懸念は筆者自らも抱いている。

エリオットの伝統という場合、伝統という言葉が、明らかにエリオット自ら、彼以前から存在した世界を指摘し、復活させ、彼自らも実践し、更にその詩作技術や詩精神がエリオットを媒体として影響力をもって継承され、伝統としての実質内容を持っているのに対して、ホイットマン的伝統という場合は、彼自らが、むしろ、歴史的意識としての継承という意味では、前からも後からも断絶された場に身をおいていることである。そして更に、最近一九五〇年代前までにホイットマンが現代英米詩の批評や研究の主流の中でまじめにとりあげられたことは殆んどなかったともいえるからである。

ホイットマンは英米詩の世界のみならず、各処に散在する一つの名前であった。或る共通のシンボルであった。しかし真の理解を払らおうとする傾向が渦巻いて行ったことは先ずなかったともいえよう。

彼の詩が赤裸な自己を歌い、感情を放出し、肉体を踊らせたその一元性と直截性の故に愛された一面、その本質である一元的なうたげの故に、現代詩の批評的主流の中では、単純、稚拙であり、感情の放出に流された表現に抑制力のない詩人としてはじかれてしまった感がある。

この間の状況については、一九五五年、ネブラスカ大学における poetry program においてホイットマン研究を始めた B. Stoltz と J. E. Miller の着想 *The Whitman Tradition*、そしてそれに加わる Karl Shapiro 等が大同

小異、認めているところである。

現代詩の主流は、その詩論、批評のみならず、詩そのものが分析であり、説明であり、意味の多様性はあれ、批評機能の表われであり、知性の複合感覚である。魂の崇拜から、精神、知性への崇拜におきかえられた現代詩の伝統は、B. Sloe のホイットマンの伝統観によれば「詩における肉体の歡喜を犠牲にし、」エリオットの伝統にその主流を求めてきた現代詩の知的主潮を New Puritanism とすればホイットマン的伝統は、いわば New Paganism であるとして⁽¹⁾いる。

詩における肉体的歡喜を犠牲にするというよりは、それが不可能であり、それよりも、正気と知性の存在証明を、よし逆説的にであれ、詩の前面、後面に具えていなければならなくなったのは、現代詩の一つの宿命でもあった。現代詩ではラブソディックなまでの歡喜の詩を歌うにしても、そこには現代における人間の真の意味での正気と知性の喪失を批評する、精神の存在証明が必要なのである。逆説的にその詩人自体の正気と知性の存在証明の裏づけが必要なのである。現代の産業文化が詩を酔狂におしやろうとする趨勢に対して、詩人は夢みる間

も、詩的ヴィジョンの中においてさえも、その知性の存在を証明しなければならぬ。でなければ、詩は詩としての正当性から酔狂に突き落されてしまわねばならぬ。現代詩の前景、或は全面にわたって、その構造内容が批評機能の表われであり、複合感覚であるのは、この産業時代における詩の可能性についての弁駁と闘争であり、それは詩の可能性の最後の一线なのである。現代詩は産業時代における生の複雑な否定である。そして、又そのことが逆に、よかれあしかれ、現代詩としての唯一の裁可の如く取扱われてきた。肉体的歡喜、詩における踊りとうたげは異端なのである。

ホイットマンの詩が生の祝祭であり、直截的な生の肯定であるということが、こういった現代詩的裁可の前では、産業時代に対して不用意であり、無防備であり、芸術的には抑制力をかいたものであるとして、却下されているとすれば、彼の詩の本質である、人間をも含めた、そして正に積極的な意味において含まれざるを得ない、「全自然の中にある生命力と宇宙意識を分有した詩人⁽²⁾」としての本質は、本当に、單純性の中に名目化されているだけのものしか、現代詩の中に復活する力は持たない

だろうか。

ホイットマンの詩集 *Leaves of Grass* が世に問われたのは一八六五年であったが、その後幾版かの版が重ねられ、終始一貫して彼が歌い続けた詩的発想の根底にあった動機は少なくともその *Democratic Vistas* (一八七一年) の中に明らかである。南北戦争終末から一八九〇年頃まで四分の一世紀にわたった *Gifted Age*、合衆国が農業国から近代商工業国へと急激に移行していた時代、それは合衆国史上、最も恥すべき社会的腐敗の横行した時代とされている。ホイットマンはいう。

「ここ合衆国において現在ほど心が空虚になったことはない。本当に信ずるということ (*Genuine belief*) が我々から離れてしまったようである。合衆国を作り上げた基盤である諸原理も正直には信じられていない。眼の前には戦慄すべき光景が展開している。完全に偽善の雰囲気にとりまいている。男は女を、女は男を信じない。人を軽蔑するような高慢さが文学を支配し、文学者の目的は何かの座興をさがすことになっている。多くの教会、宗派、悪質な幻想が宗教の名において横行し、……実業界の墮

落は予想以上に測りがたく大きい。国、州、自治都市、あらゆる部局にわたって、裁判所以外のすべての公務に腐敗がしみこみ、収賄、偽瞞、悪管理が行なわれ、裁判所までけがれている。ビジネス（このあくなき蚕蝕の現代言葉ビジネス）の世界では、唯一の目的は如何なる手段にあれ、金を得ることなのである。」

産業主義の利潤追求の動機が大きく人間を蝕む、というような気のきいた表現はしていない、しかしそれなるが故に、尚更、金銭利得に蚕蝕されて行く社会の姿に彼が受けている衝撃は生々しい。そして更に彼は続ける。

「私は敢ていう、我々の新世界のデモクラシーはかくまでその社会的様相において、その真の宗教的、道徳的、文学的審美的結果においては殆んど完全な失敗であった。」

かくして歌ったホイットマンの自我や、デモクラシーや、乱舞が、当代の産業的時流に乗ってのそれではなくて、むしろそれとは逆流するものであったことはこれで明白である。逆流というより全く離脱した自我ともいえる。詩の中で彼の自我はその潮流をふりむきさえてい

なつ。

One's self I sing, a simple sepearete person,
 Yet utter the word Democratic, the word En-Masse.
 (One's-self I sing)
 I celebrate myself, and sing myself,
 And what I assume, you shall assume,
 For every atom belonging to me as good belongs to
 you.

My tongue, every atom of my blood, form'd from
 thid soil, this air.

I am satisfied—I see, dance, laugh, sing:

Smile O voluptuous cool-breath'd earth!

Earth of the slumbering and liquid tree!

Earth of departed sunset-earth of the mountains
 misty-top.

Behold, I do not give lectures or a little charity,

When I give I give myself.

(Song of Myself)

(何の束縛もない純粹自我ともいうべき自分自身を
 祝い、歌う。しかし単一ではあっても切り離された

特別のものではない。皆と一緒なのだ。人々のもっ
 ている各々の自分自身は皆かよい合っているのだ。
 私の舌、私の血の原子は、この土、この大気と交っ
 ているのだ。冷く呼吸する大地、水々しい木、かす
 む山と交っている自分自身、それを私は人々に与え
 るのだ。)

あたりをかまわないこの歌い方は、余りに単刀直入にす
 ぎ、素朴にすぎ、解説さえも拒む断言である。しか
 し、先に引用した Democratic Vistas の社会批判と結び
 つけた場合、この自我は、その社会の中になつわり苦し
 みながらも、辛うじて残存する自我ではなくて、いわ
 ば、筆者自身が思いあたった言葉であるが Virgin Self
 ともいえるものである。それは腐敗した社会をふまえて
 孤立し、とぎすまされた自我意識ではなくて、そのまま
 Virgin Group Consciousness にながり、Cosmic Con-
 sciousness にもつながっている自我である。しかも、その
 自我意識の哲学には、何の言及もない所に、後ふりかえ
 らない力がある。彼にとつて、自己は、いわば当代の社
 会模様からは絶縁体なのである。彼の詩がアナクロニズ
 ムとして一蹴されがちであるそこにこそ、独立したポエ

ジーとしての力が具っていると見られるのである。「ロレンスは、彼にとって赦すべからざる、現代産業時代の地獄からとび立ったが、我々の理解をさまたげるほど遠くまでとはび去らなかつた。だが、ホイットマンはとびたつ必要がなかつた。彼は自ら発芽し、繁茂し、何の準備もなしに、一かきで、彼はアメリカ・デモクラシーの詩人となつた。」⁽³⁾ というシャピロの言や適切である。だが、ホイットマンの出発点をアメリカ・デモクラシーや民衆詩人としての意識におくことは大きな誤謬を犯しやすい。何故なら、それらの言葉は彼の出发点を安易な政治意識に求め、今日的マス・コミ的解釈へと追いやりかねないからである。むしろ、ホイットマンの詩人としての出发点は、幾重にも反省された後の素朴な道徳的意識としての a single separate person としての自分自身なのである。しからは、その絶縁体がどうしてそれ自らにおいて spontaneity を備え得るのか。

自分自身は無限に受けつがれてきた繁殖の世界、生殖の力の分身であるからである。彼は、生殖され、生殖して行く自分自身と、そして生殖そのものの流れを自然にも自分にも感じとるその交流の世界を原理として立った

のである。

I am an acme of things accomplish'd, and I an
encloser of things to be.....
Before I was born out of my mother generations
guided me,

My embryo has never been torpid, nothing could
overlay it.

For it the nebula cohered to and orb,
The long slow strata piled to rest it on.

Vast vegetables gave it sustenance,

Monstrous sauroids transported it in their mouths and
deposited it with care.

All forces have been steadily employ'd to complete
and delight me,

Now on this spot I stand with my robust soul!

(Song of Myself)

私は既にこの世にとげられて出て来たものの極致でもあり、これからでてくるものも包んでいるものだ、.....

私は私の母から生れる前に幾世代の生殖に導かれ

私の胚は眠つたこともなく、何ものにも打ちひしがれずに
きた。

胚を守るために白い液体が球に粘着し、
長く徐々と溜つた積層がそれを芽ばえさせ、

膨大な植物がそれを支えはぐくみ、

怪とかげが口にそれを運び、そつとおいたこともあろう。

あらゆる力がしつかり寄って私を作りあげ、喜ばし、
そして今この地点に私は頑丈な生氣をもって立っているの
だ！

人間をも含めた自然の間の生殖力、躍動する性の力が
「草の葉」の基底であり、構造内容である。その意味に
おいて、アメリカの代表的な知識人の思想的遍歴でもあ
り、二〇世紀文明に対する懐疑の書でもある *Education*
of Henry Adams (1918) の中で、ヘンリー・アダムズが
突然ホイットマンとの出会いに衝撃をうける処がある。
歴史の秘密を探究している間に、彼は自分の住み渡った
一九、二〇の両世紀を越えて行く。彼の求める秘密の鍵
は、彼自身の住む産業時代の力強い動力^{ダイナモ}から、一三世紀
の *Virgin* マリヤまでさかのぼる。因果連鎖としての歴
史を辿りながらも、やがて彼は、社会的連鎖、時間の連
鎖、思想の連鎖をしりぞけ、遂に力の連鎖に思い至り、
一三世紀の *Virgin* と一十九世紀の *Dynamo* の間の結びつ
きに突き当たる。この自叙伝の中の三人称の主人公アダム
ズは続いて「力としての性」の問題をとりあげる。

「ピューリタンの中に育った者は性を罪だと思っ
ている。それ以前の時代には、性は力であった。芸術

も美も必要とされなかった。ピューリタンの中でさ
えも、エペソ書のダイアナや東洋の女神達がその美
の故に崇拜されたのではないことを知っている。そ
の力の故の女神であったのである。生きたダイナモ
であり、生殖であり、最も偉大で神秘的なエネルギー
であり、生むことが女神のすべてであったのであ
る。……一方、ルーブルとシャートル(マドンナに
よって鼓吹された芸術と建築)には、アダムズが眼前
にまざまざと成し遂げられている芸術作品によって
知ったのであるが、最も高貴な芸術作品の大部分を
つくりだす創造主そのものである最高のエネルギー
があった。それは嘗て夢みられた蒸気汽関車や発電
機以上に人間精神に巨大な魅力を放っていた。けれ
どもこのエネルギーはアメリカ精神にとっては未知
のものであった。アメリカでは *Virgin* は先頭に立
つこともないだろうし、アメリカのヴィーナスは存
在もしないだろう。……アダムズは沈思し始めた。
あらゆる古典芸術が常にそうであったように、性の
力に執着してきたアメリカの芸術家を知っているだ
ろうか、と問いながら。ただワルト・ホイットマン

だけが思い当った。その他はすべて性を情緒として扱っただけである。力としてはホイットマンだけである。⁽⁴⁾

歴史の因果連鎖を力のそれに求めた二〇世紀の代表的思想家の一人の中にホイットマンが突如として触発したのは彼の復活力を示す一例にはなるだろう。

更に、その人間に全面的に蔽いかぶさるかの如く影響というよりは接触して行ったのはD・H・ロレンスである。

次の二つの引用詩を較べてみよう。

The spotted hawk swoops by and accuses me.....

I too am not a bit tamed, I too am untranslatable,

I sound my barbaric yawp over the roofs of the world.

(Song of Myself) (174: 筆者)

.....was growing a startling big bird

On the roofs of the world,

A bit awkward, and with a funny squawk in his voice,

His mother Liberty trying always to teach him to coo

And him always ending with a yawp

Coo ! Coo ! Coo ! Coo-ark ! Cook-ark ! Quirk !! Quirk !!

Yawp!!!

(The American Eagle)

一見してこの二つの詩は同一詩人のものとも云えるほど類似している。共に「yawp」という蕃声をはりあげるに至った両詩人の同族性に大笑を禁じ得ない。しかし、蛮声の同族性とはいえ、これに対する誤解をさけるために、この蛮声が産業時代に投げつけられた投げやりな罵声でないことは断わられねばならない。人々が忘れているか、何の因果か抑圧している肉体に潜在する力を自発させた叫び声である。単純といえば単純である。しかしそのコンテキスト如何によっては、無限の意味が触発されて行く。だが両詩人とも註釈的コンテキストは加えなかった。

ホイットマンとローレンスの詩の類似性を例証するには事かかないが、しかしそのことがローレンスはホイットマンから影響を受けたというような関係で説明され得るものではないだろう。それはより同族的であるといえよう。ローレンスの小説の前景に流れる或る暗さ、重たさには明らかにホイットマンとは異質な長いヨーロッパ文明の暗さと影がまつわっている。しかし彼の詩の中で歌った鳥、獣、魚の生命の自己充足した躍動感はいっ

トマンとの歴史的時間のへだたりを全く消殺している。固陋なヨーロッパ的伝統や産業時代の重圧からそこまでとび立って行く過程をも含めた彼の小説や批評の行きついたゴールは彼の後期の作品である *The Man who Died* や *Apocalypse* に明白に結晶している。長い遍歴の後、ローレンスは行きついた。

「(一度は処刑されて死の暗を辿りながら奇蹟的に蘇生した『死んだ男』は、アイシスの女神の下、オシリスの男性をまつ) 彼女の身体にうずくまった。彼はまぶしいばかりの男性の輝きを感じ、その力は堂々と彼の腰に湧き上った。

『俺は復活した!』
堂々として、彼の腰深くおさえがたく輝きながら、彼の体内の太陽は登り始め、その手足に火を送り、彼の顔は無意識に輝いた。」

(*The Man Who Died*)

「只今、ここに、肉の中にあつて生命に輝くものは我々のもの、我々のみのもの、しばし我々のみのもの。生きて肉の中にあり、生きて化身する宇宙の分身であり、陶醉、乱舞すべきもの。私の眼が私の分

身であると同様、私は、太陽の分身である。私は、大地の分身であり、私の血は、海の分身である。

私の生気である魂は私が人類の分身であることを知っているし、私の魂は偉大な人類の魂の有機的分身である。私のスピリットが私の国の分身であるように。私自身の自我を辿ることに私は私の家族の分身なのだ。」

(*Apocalypse*)

肉体そのものが我であり、その肉体は地につながり、水につながり、人類につながる、ローレンスの辿りついた自我と連帯意識と宇宙意識はホイットマンの「草の葉」の出発点と同族の時間と空間に立っている。出発点と到達点というような表現は、それ以前と以後の展開過程の相違を予定させるが、しかしあくまで両詩人の立脚した力点は肩寄せ合う同族性のものである。ローレンス自らその同族性に歎呼している。

「大詩人ホイットマンは私に大きな意味を与えた。唯一人或る道を切り開いた人、ホイットマン。唯一の開拓者。イギリスの開拓者の中にもフランスの開拓者の中にもいない。ヨーロッパの開拓者の中にも

ホイットマンのような人はいない。ヨーロッパの擬似開拓者達は、単なる刷新者だ。アメリカでもそう
だ。ホイットマンに先がけたものは誰もいない。あ
らゆる詩人に先がけて、未開拓の生活原野に切りこ
んだホイットマン。彼をこえて行ったものはいな
い。偉大な公道の行きつく処に張った広い不思議な
キャンプ。今もホイットマンの張ったキャンプ場に
キャンプする新しい詩人達も多いが、しかし、本当
に彼をこえて行ったものは誰もいない。」

(*Studies in Classic American Literature*)

ローレンスがホイットマンに感じとったこの affinity
は明らかにエリオットの伝統という場合の tradition と
は異質のものである。Carl Sandberg の「シカゴ詩集」、
Hert Crane の 'The Bridge' にみられる同族性も亦同じ
線上にならぶものである。この意味において、Whitman
Tradition は Whitman Affinity と書きかえられるべき
性質のものかも知れない。

だが、問題はこの同族性のみを並列することによって
は何ら発展しない。むしろ、ローレンスとホイットマン
の大きな異質があればこそ、この同族性が意味をもって

くる。ローレンスの思想の中にホイットマンのそれとを
一貫して相對峙するものがある。ホイットマンの中には
一貫して流れる接触への衝動がある。

Is this then a touch? quivering me to a new iden-
tity.

Flames and ether making a rush for my veins,
Treachorous tip of me reaching and crowding to
help them,

My flesh and blood playing out lightning to strike
what is hardly different from myself,

On all sides prurient provokers stiffening my limbs,

.....
Unbuttoning my clothes, holding me by the bare
waist.....

(*Song of Myself*)

ホイットマンの接触欲は終始一貫して健康であり、頭健
である。それに対してローレンスの場合は、先程も少
しくふれたように、そこまでに辿りつくに暗い試練を
なければならなかった。Noli me tangere! (私にさわ
るな!)である。

ローレンスは、現代の産業主義が男と女との愛情関係
にまで侵透し、それが交換関係、たとえそれが精神的交

換関係であれ、give and take の原則に立っていることを憎悪した。この愛情の give and take を予想して接近する人間を、拒んだ。献身を誓う女の愛そのものが give and take に蝕ばまれてゐるとしてこれを拒んだ。与えるもののみ多くして、奪うものは少しとする態度はローレンスにとって同じ基底でしかなかった。この精神は又ローレンスにとってキリスト教の献身と救済に通じていた。ローレンスは作品の半ば近くの量と質をかけて Christianity を攻撃してゐる。Sons and Lovers から Apocalypse に至る彼の全作品を通じて、本来の人間性を長く蝕み、ゆがめてきた、横の線として、広くとりまく産業主義と、縦の線として、その現代に尚君臨しつつうそぶく現代のキリスト教が縦横に織りなされてゐるのを感じとらない人はいないだろう。ローレンスはこの現代から脱出するに、人間を一度殺すことを想定している。現代を拒む力を具えた肉体を再生させるためである。現代のヨーロッパ的世界の中に生まれ、育つ人間はこの縦横の線にからまれ、そのままの延長線上においては、精神の呪縛と肉体の束縛は解かれ得ず、彼の実際の世界遍歴は始まったのである。その内部にある限り、

「産業的課題が、人間の全エネルギーを単なる利得競争の中へおしこんで行く基盤からおしかけ……醜悪、醜悪、醜悪な理想、醜悪な宗教、醜悪な希望、愛、着物、家具、醜悪な人間関係……。」

の中に、「人間の本能的機能は全く、死滅し」⁽⁶⁾「我々の文明は殆んど人と人との、男と男との、男と女との間に自然に流れる普通の共感を破壊してしまつた。私が生活の中に回復したいのは正にこの共感なのである。」⁽⁷⁾

ローレンスのこのヨーロッパ文明の現実に直結した発想は、小論の始めに引用したホイットマンの Democratic Vistas におけるアメリカ Gilded Age の現実を直視した眼と同じ産業時代への反撥である。唯、両者の相異点は、アメリカ文明に対するホイットマンの方は、出発したばかりの合衆国建設の原理は「殆んど失敗に終つた」という挫折感と共に、新たな出発も希望も得る若さを秘めているのに対して、ローレンスの場合は深く長い歴史の重圧感がのしかかつてゐる。しかし共々にこの産業主義に対する本質的には同質の反撥が次のエリオットの発想を思い出させる。

「社会的理想の中に喰いこんでくる利潤動機の肥

大、天然資源の活用とその乱獲との区別、労働力の活用と搾取との区別、原産者とは対照的に取引家に不当にもたらされる利益、財政機構の誤導、金貸しの不正行為、その他諸々の商業化された社会の様相——これらはキリスト教的原理から精査されねばならないものである。公共の破壊を伴ないつつも私利利潤追求の原則の上に立つ社会機構の行きつく処、規制なき産業主義による人間性の歪曲崩壊、天然資源の費消をもたらし、且この大量の物質的進歩は将来の幾世代が高価な犠牲を支払わねばならないものであることを、我々は知らされつつあるのだ。⁽⁸⁾

このエリオットの産業社会に対する攻撃、その人間性の崩壊についての詮索は、一面、ローレンスやホイットマンより現代的綿密さを加えているが、しかしその反撥する対象と、その *humanity* への敵対としての受けとめ方は同質である。唯、エリオットの場合は、この引用箇所の中にでさえ、彼の立場を覗かせているように、これを引用した原典 *The Idea of Christian Society* において、彼の立場は終始一貫して鮮明である。彼は産業社会を糾弾するのに、明らかにキリスト教的立場からこれを断罪す

る姿勢をとっている。

「現代生活の多量の機械化は単に非キリスト教的目的への裁可である……それは少数のキリスト教的生括の意識的追求に敵意をもつものであるのみならず、世界中にあるどのキリスト教社会を維持して行くことに対しても敵意をもつものである。」⁽⁹⁾ (傍点筆者)

ここで疑問になってくるのはエリオットの固持するキリスト教社会とは如何なるものか、である。

「キリスト教社会という言葉を用いる場合、私はもと、クリスチャンと呼べるような社会の研究から引き出されてくる或る概念を意味していない。キリスト教社会と呼べるような社会が、その名に値すべく導かれて行かねばならない目的を理解することの中に於てのみ、見出されるような或るものなのである。……私の関心は、我々が住んでいる社会の理念——もし何らかでもあるならば——は何んであるうか？ その社会は如何なる目的に向って調えられているものであるうか？ という質問にかかっているだろう」⁽¹⁰⁾

「(キリスト教社会とは)その中に一つに結びついた religious-social code of behaviour を持っている社会であり、……その中では、人間の自然な目的——社会における節操美德と安寧——がすべての人に認められ、超自然的な目的——至福 (beatitude)——それが見える眼をもっている人にとっての目的、が認められている社会。」⁽¹¹⁾

エリオットがキリスト教社会という規定によって意味しようとしているものは一面曖昧であるが、それは現代産業社会にも固定したような姿において現存するままのキリスト教の形態をさしているものではない、ことをことわっている。

「英国のような産業化された社会の中で、国民がキリスト教をキリスト教がなすがままに保持しているということに、私は驚ろく。キリスト教の宗教組織においては、キリスト教王国は、キリスト教の単純な農業社会と漁業社会とに適するような発展段階に固定されたまま存続している、ということが出来るだろう。又現代の文質文明の組織——もし「組織」という言葉が世辞すぎるならば、我々は、錯綜と云

ってもいいのだが——は、キリスト教社会形態が、完全には適應できない世界をつくり出してきたという事が出来る。」⁽¹²⁾

エリオットのいわんとする中核は、或る社会を構成している人々の behaviour (日常行動) が宗教的規範に律せられ、それがその社会の結合原理であり、人間の現実的な安寧幸福が信仰に結びつけられている社会、ということになるが、しかし彼が無意識的にか使用している religious や beatitude という言葉は明らかに彼自らがその一員である社会の正統キリスト教をさし、自らも属している社会に「伝統」として、そこにあった社会につながるものである。唯、彼のいうキリスト教は文明の発展に應じて生々発展しなければその適應性を失う、ということは何じられる。しかし、エリオットはこの後半において、産業社会が、キリスト教にその integrity の原理を求めることが不可能である、といっている。又、キリスト教が現代の産業社会の変化に全的に応じて生々発展の形態を見出すこともできない、といっている。つまりかなり大胆にエリオットの論旨を要約すれば、現代の社会はキリスト教社会から産業社会に移り、その産業社会に

integrity は認められない、崩壊するのみであり、その崩壊とはエリオットにとっては墮獄なのである。救い(Salvation)なきものの寄り集りなのである。

Madam Sosostris, famous clairvoyante,
Had a bad cold, nevertheless
Is known to be the wisest woman in Europe,
with a wicked pack of cards. Here, said she,
Is your card, the drowned Phoenician Sailor,

And here is the one-eyed merchant, and this card,
Which is blank, is something he carries on his back,
Which I am forbidden to see. I do not find
The Hanged Man. Fear death by water.
I see crowds of people, walking round in a ring.
Thank you. If you see dear Mrs. Equitone,
Tell her I bring the horoscope myself:
One must be so careful these days.

Unreal city,
Under the brown fog of a winter dawn,
A crowd flowed over London Bridge,.....
(The Waste Land)

ソノストリス夫人は有名な千里眼、
悪い風邪をひいたが、少しもめげず、

ヨーロッパ一の賢い女という話、
狡いトランプを一組もっている。ほらこれが、
あなたのカードよ、溺死したフェニケアの水夫よ、
.....

それからこれが一目の商人、そしてこのカード、
何もかいてないけど、何か男が背中にしょってあるわ、
あたし、見ちゃいけないことになってるの。見つからないわ
あの首つられた男。水死の恐れがあるわ。
群がる群衆が輪をなしてぐるぐる歩いているのが見える
わ。

おや、どうも有難うございました。もしエクイトン夫人に
お会ひでしたら、
星占ひ表は私があつて見せたいと思つておつて——
この頃とても気ざくばらなくちゃなりませぬわ。

幻の市、
冬の夜明け褐色の霧の下
群衆がロンドンブリッジの上を流れて行く、

Who is the third man who walks always beside you?
When I count, there are only you and I together
But when I look a head up the white road
There is always another one walking beside you
Gliding wrapt in a brown mantle, hooded
I do not know whether a man or a woman

— But who is that on the other side of you ?

(ibid.)

いつも君の傍について歩いているのは誰なんだ？

数えてみると、君と僕だけなんだ

それでも白い路の行先を見あげると

必らず誰かもう一人君の傍を歩いてるんだ

茶色のマントに体をくるんで、頭巾をかぶって静かに歩いてる

それが男か女かわからないんだが

——しかし君の向う側にいるのは誰なんだ？

利口げにしゃべり散らす、何のまとももない女、散乱した現実を散乱とも意識しないで、気をつかっている女、救いなき女、それ以上は何も見えない、見えたとしても、後半の引用節にあるような幻覚、頭巾をかぶった、黒い影しか見えない、群衆の流れる幻の町ロンドン、これが時に軽妙に、時に重苦しく、時にひからび切ったように、エリオットが描こうとする産業時代の *disintegrity* である。 *Unreal city* と重く発言しながら炯炯として輝くエリオットの批評眼と分析力が諸々の複合感覚を漂わしている。最も注意すべきは、この二つの引用節の中に出てくる「首つられた男」と「頭巾をかぶっ

た黒い影」にエリオットはキリストを聯想させていることである。ただし、注意深く読みとることの出来る読者に対してで、詩中のトランプの女や幻覚をみる男にはない。エリオットが俯瞰するこの「荒地」的崩壊感覚は帰趨力を失った獣の群であり、*salvation* なき盲人の群なのである。つまりエリオットが「荒地」や「空洞の人間」において描こうとしたものは、神の不在証明であったのである。しかし又、それと共に、その不在証明の中に、この神は嘗て伝統として存在したことを、その形骸的痕跡をおりこむことによって暗示しようとしている。「荒地」や「空洞の人間」において、崩壊感覚を繰りひろげながら、神の不在証明をやつてのけているエリオットは、その詩的構成自体において批評精神の存在証明をもやつてのけたのである。詩の構造の表皮層に崩壊感覚を、その内部構造に神の不在証明を、そして詩人自らの統一原理に批評精神を、具えて現代詩の主流の先頭に立った彼が最後に切札として出してきたものが、先に引用した *Idea of Christian Society* の中でも彼がわずかながらふれている「少数の人々」によって、或は「見る眼をもっている人」には見える至福の世界に潜入することであ

った。

Pray for us sinners now and at the hour of our death
Pray for us now and at the hour of our death.

(Ash-Wednesday)

われらが罪人のために今と死の時刻に祈れ
今と死の時刻にわれらがために祈れ。

I am tired with my own life and the lives of those
after me,

I am dying my own death and the deaths of those
after me.

Let thy servant depart.

Having seen thir salvation.

(A Song for Simeon)

われ自らの生と 我につづくものの生に疲れ、
われ自らの死と 我につづくものの死をおって
お身がしもべをこの世より去らせ給え、
お身が救いを見たればなり。

これはエリオットの詩でありながら、エリオットは自分の言葉ではないともいうだろう。カトリック教会のミサにも通じる祈りの世界である。いわば狭き門より入った、神の存在証明である。しかし、これらエリオット後期の神の存在証明の祈りの世界が、「荒地」や「空洞の

人間」の神の不在証明としての絶望の詩的 vision の答えになり得るや否や。或る意味では、既に「荒地」や「空洞の人間」の中に、エリオット自らの頭の中では、この祈りの世界に踏み出す準備段階として用意周到なる駒や網が張られていたことは、改めて注意深く読みとる者にはくみとれる。『首つられた』が見えないわ」といった女や、「頭巾をかぶった姿が男か女かわからないが影のようについてくる」幻覚を見ていた人間達は虚像の市ごと、Ash-Wednesday 以後とんでん返しをして贖罪の祈りを捧げる列に加わらねばならぬ。

エリオットの個性脱却論、伝統論、そして祈りの世界については、嘗て筆者は、『一橋論叢』(四十巻、第三号)において「T・S・エリオットの能動と受動」と題する小論の中で、論じたことがあるので、その重複はさけるとして、エリオットが詩的ヴィジョンとして歌い出した祈りの世界が、擬似信仰であるとの疑問を呈出した批評に、Whynham Lewis の *Men Without Art* があり、エリオットの祈りの世界を最も流動的に、好意的に味読しても、尚一抹の疑問を発し、エリオットのいうような世界が、果して現代の歴史的進行の方向において現実に起り

得るかどうか極めて怪しいとする S. Spender の *Destructive Element, Creative Element*、そして最後に、エリオットのいわんとすることがまちがっているといえるものもないし、逆にそれが正しいといえるものもないとする Raymond Williams の *Culture and Society* をあげることによって、筆者自身もエリオットへの多大の疑問を投じながら、正誤何れとも決しがたい立場をとることにとどめよう。それは、筆者自らがエリオット解釈への正しい努力を放棄することを意味するものではなく、正誤判断の最後の基準ともなるエリオットの最後の切り札として呈出してくる正統カトリシズムの地模様ともいふべきものが筆者自らをも含めた東洋の世界にはないからである。近代的理念としてのキリスト教的神が我々の頭の中にあるといっても、東洋的仏心としての宗教的地模様の形骸しかもたない我々が、エリオットの伝統論からは最後的にははじかれてしまうからである。このことがあながち筆者の早急な敗退的断定でないことは、エリオットが指摘するような地模様としての伝統の中に生れ育ったはずの先述の一流の批評家達でさえ、まじめさの限りを尽して明らかにエリオットの立場への否定的反論を展開

開していることによっても弁じられるであろう。

むしろこれらのまじめな批評家が、エリオットの中に正しい答えを探し出そうとして多大の努力を払いながら、一方において、全く反エリオット的であるローレンスの中に共感をおぼえる答を発見しているのである。

S・スペンダー、F・R・リーヴィス、レイモンド・ウィリヤムズの名をあげるだけでも充分であろう。彼等が共通してローレンスに共感する処を焦点にしほれば、

「私はキリスト教の偉大さを確に知っている。だがそれはあくまで過去の偉大さである。これら初期のキリスト教徒達がいなかったら、人間は暗黒時代の混沌と絶望の不幸から浮かび上ることはできなかつたろう。私も紀元後四百年という年にうまれていたら、おゝ神様、真実の熱烈なキリスト教徒となつていたことでしよう。だが私は今一九二四年という年に生を亨けている。キリスト教の探究精神も今は終わった。探究ということはキリスト教から全く失われってしまった。」

更にローレンスはヨーロッパ文明の過去から流れてきた歴史的意識も充分に感じとりながら結論する。

「もし我々の文明が性の火をあかあかと燃え読けさせ、度合こそ違え、その力と交感の焰を輝かせ読けることを我々に教え読けていさえすれば、我々はすべて愛し合って生きてきたろう。愛し合つてとは、つまりは我々があらゆる生活、あらゆるものごとに對して親しく結びつき、喜びに溢れているということだ。」⁽¹³⁾

例えば魚、花、獣そのものに内在する生命との接觸を歌った詩にみられるが、散文にしぼられた（実はローレンスの思想や感覚を散文に表わすことは困難なのであるが）このローレンスの焦点がホイットマンと觸発する一節を今一度振り返ってみよう。

「ホイットマンはなるほど前を見、後を見た。がしかし、彼はあらゆるものに物欲しくあこがれるようなことはしなかった。彼の叫びの真髓を理解するためには、即刻の瞬間を、その叫びの迸り出る源にまで押寄せてくる生の存在を純粋に認めねばならぬ。永遠とは、現実の『現在』から抽象された概念である。無限とは、追憶の蓄積、あるいは野心の蓄積にすぎない。つまり人間が作り出した概念にすぎない。」

い。ゆらめき、過ぎゆく「現在」の時間、これこそ『時』の中樞である。これこそ宇宙を支える神の内
在し給う姿である。宇宙の中樞は鼓動であり、肉体をそなえた自我でもある、それは神秘的ではあるが、觸れることのできるものである。⁽¹⁴⁾

エリオットに教えられた神への慄きは、実はエリオットの頭悩への怖れを抱かされたのではないかと思われるほど主知的な現代詩的主潮に、ホイットマンとローレンスの肉体が火花を散らして衝突するかの感がある。ホイットマン的自我と肉体との讃歌がエリオットの攻撃するような個性や情緒への耽溺ではなく、むしろ、産業社会に對して、より実効力をもつ非個性のつながりの世界であり、自発するエネルギーの伝承でもあることの証査はあげられた。

だが、尚まだローレンスとホイットマンとの觸発は、野蕃な體質的類似にすぎないとする知的な批評に對して、両者とは極めて異質の體質をもった詩人、しかも多分にエリオットの知性からしても言葉への慎重さをそなえ、事実、エリオットやボードレル、ヴァレリーなどからその象徴的手法の影響をうけた詩人 Wallace Stevens

の代表作であると思われる Sunday Morning の中の山場ともなる数行を引いてみよう。

Supple and turbulent, a ring of men
Shall chant in orgy on a summer morn
Their boisterous devotion to the sun,
Not as a god, but as a god might be,
Naked among them, like a savage source,
Their chant shall be a chant of paradise,
Out of their blood, returning to the sky;

しなやかにもあらくも、輪をえがく仲間たちが
湧きかえって太陽の光におぼれ、

夏の朝、酔いしれて宴をかんでるだろう。

神としてではなく、神あらばかくもあらん

野性の本源のように、赤裸の太陽に身をまかせて。

彼らのうたげは樂園のうたげともなり、

血からほどばしり、空にかえって行くもの。

もはや、この詩人がホイットマンに贈っている讃歌を引用する必要もないだろう。W・ステイヴンスに見られるエリオットの知性とホイットマンの肉体の交錯というか融合について論じることが、実はこの小論への或る実質的な答ともなろうが、稿を改めることにしよう。

附記

実はこのような機会に、常日頃からの懸案であった重要な課題に、小論の始に取組む予定であった。わずかにこの中でもふれたように、エリオットのいう正統カトリシズムとかキリスト教的伝統というような場合、厳密には我々の日本においてはその生活、文化の地模様としてはその意味にかなりの相違がおきることである。このことは更に、poetry とか religion¹⁾ 或は industry というような論説の素材でもある幾つかの重要な言葉が彼等の生活、文化の模様の中に占めてきたそれらの位置や内容が日本語の「詩」や「宗教」や「産業」という言葉に必ずしもパラレルには移行しない部分があり、むしろかなり本質的なまでに違い違った場合も起こっていることについて詳細に論じる積りであった。が、実はこのこと自体広範囲にわたる大きな一つの研究課題であって、改めて次の機会にわたる大分には尽せないことに思い至り、割愛したことをことわらねばならない。そしてこのような研究と相またなければ西洋詩の日本語による研究や批評は実は大きな片手落にもなりかねない一面を見逃すわけには行かないからである。

(1) *Start With The Sun*: James E. Miller, Karl Shapiro, Bernice Slovic; pp. 5, 6.

(2) *ibid.*

(3) *ibid.*, p. 57.

(4) *The Education of Henry Adams*: Henry Adams (Boston: Houghton Mifflin Company, 1918) pp. 384—

385.
(5)(6) *Nottingham and The Mining Country*; pp. 94, 119.
(7) *The State of Funk: Selected Essays*; pp. 100—1
(8) *The Idea of Christian Society*; T. S. Eliot: London, 1939, p. 33 and pp. 61—2.
(9) *ibid.*, p. 33.
- (10) *ibid.*, p. 3.
(11) *ibid.*, p. 34.
(12) *ibid.*, pp. 30—1.
(13) *Sex versus Loveliness: Selected Essays*; p. 18.
(14) *Preface to The American Edition of New Poems.*
- (一橋大学助教授)